

関係各位



## 「人並みに働けば十分」が過去最高水準（52.5％）に

～ 新入社員の“ほどほど志向”さらに高まる～

### 平成26年度 新入社員「働くことの意識」調査結果

公益財団法人 日本生産性本部 / 一般社団法人 日本経済青年協議会

公益財団法人日本生産性本部（理事長 松川昌義）の「職業のあり方研究会」（座長 岩間夏樹）と一般社団法人日本経済青年協議会（代表幹事 大塚恒博）は、平成26年度新入社員2,203人を対象にした「働くことの意識」調査結果をとり纏めた。この新入社員の意識調査は、昭和44年度に実施して以来46回目を数え、この種の調査ではわが国で最も歴史のあるものである。

主な調査結果は以下のとおり。

#### 平成26年度新入社員「働くことの意識」調査結果のポイント

「人並みか人並み以上か」では、「人並みで十分」が今年度さらに増加（昨年49.1 52.5％）。「人並み以上に働きたい」（昨年42.7 40.1％）を大きく上回り、過去最高だったバブル末期と同様の売り手市場時の意識になってきた。（2頁参照）

「どのポストまで昇進したいか」では、昨年度「社長」が過去最低（12.7％）を更新したが、今年度は「専門職<スペシャリスト>」が過去最低（19.9％）を更新した。この10年の傾向として昇進志向とスペシャリスト志向双方の弱まりが見られる。（3頁参照）

「この会社ですっと働きたいか」とする回答は、「この会社に定年まで勤めたい」が一昨年度34.3％で過去最高の数値となったが、昨年度は30.8％に減少し、本年度さらに28.8％まで減少した。ここしばらく増加していたが、景況感の好転とともに減少に転じている。（3頁参照）

「残業は手当てがもらえるからやってもよい」が急増し、昨年度の63.0％から69.4％と過去最高を更新した。昨今のブラック企業・残業未払いのニュースをみて、残業はいとわないがそれに見合った処遇を求めている傾向がうかがえる。（4頁参照）

「デートか残業か」では「残業」（81.3％）、「デート」（18.3％）と、プライベートな生活よりも仕事を優先する傾向が伺えるが、ここ数年は、やや「デート派」が増加（昨年15.7％）している。（4頁参照）

「第一志望の会社に入れた」は、一昨年度の60.9％から昨年度52.0％と大幅に減少し、設問設定以来で最低だったが、本年度は55.0％とわずかに改善した。（5頁参照）

#### 【本件に関するお問い合わせ先】

公益財団法人 日本生産性本部〔ワークライフ部(担当)：下村・中川 TEL:03-3467-7252〕

電子メール：slr-info@jpc-net.jp

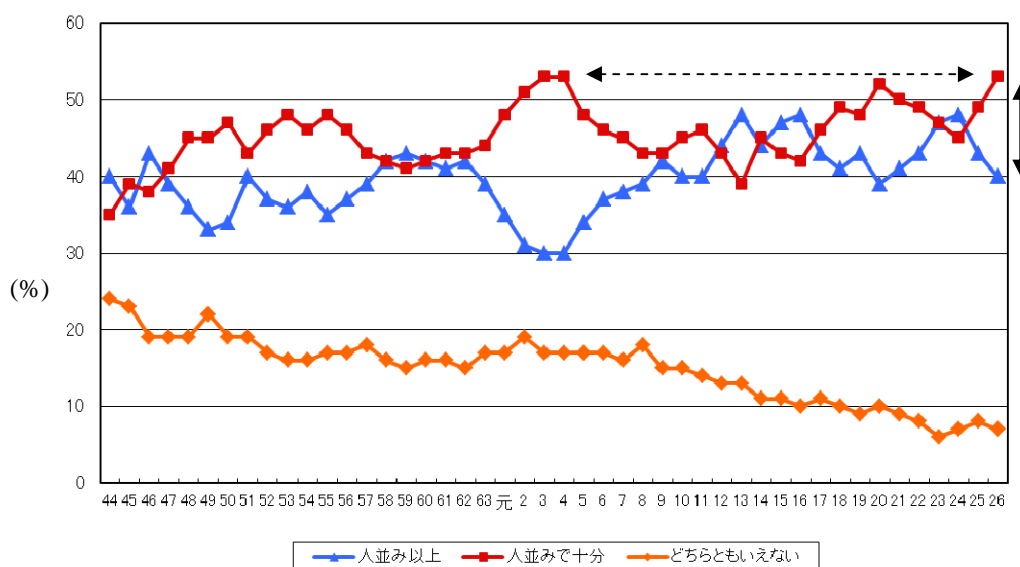
一般社団法人 日本経済青年協議会〔担当：畔津(あぜつ)、梅田 TEL:03-3469-2381〕

本調査の報告書は7月初旬より「生産性労働情報センター」より刊行・頒布いたします  
-大手書店・ネット書店、当財団売店・ホームページ (<http://www.jpc-net.jp/lic>) にて取扱い-

## 1. 「人並みに働けば十分」が過去最高水準に ～ “ ほどほど志向 ” 高まる ～

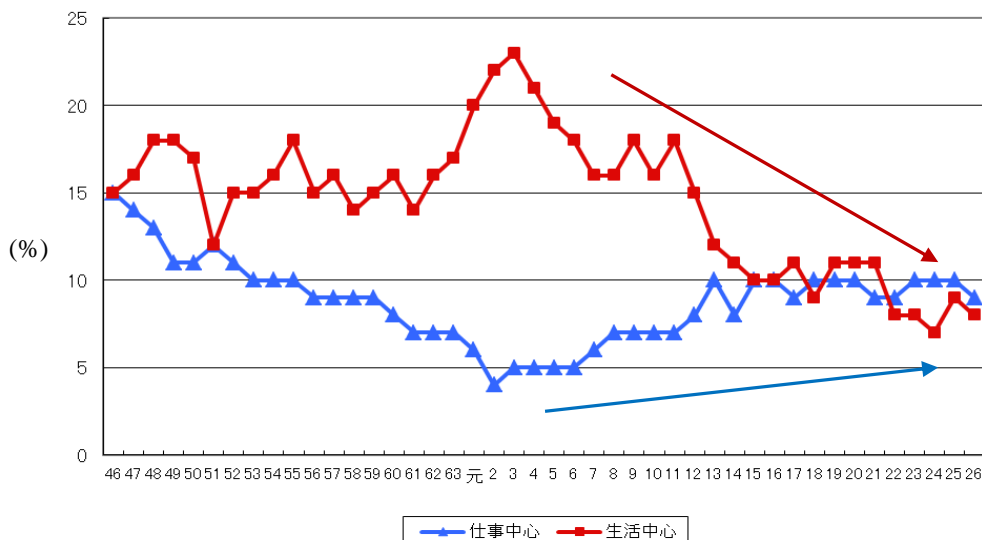
その年の新入社員の就職活動が順調であったかどうかで敏感に変化する項目に、「人並み以上に働きたいか」(Q8)がある。景況感や就職活動の厳しさによって、「人並み以上」と「人並みで十分」が相反した動きを見せる。特にバブル経済末期の平成2～3年には、「人並み以上」が大きく減り、「人並みで十分」が大きく増えたが、その後の景気低迷にともない平成12年以降入れ替わりを繰り返している。ここ数年では、平成24年に厳しい就職状況を背景に「人並み以上」が「人並みで十分」を逆転したが、平成25・26年度と「人並み以上」が減少(42.7→40.1%)するとともに「人並みで十分」が増加(49.1→52.5%)し、バブル経済末期の平成2～3年に迫る勢いとなり、両者の差も開いている。会社に大きく貢献したいという意欲よりも、“ほどほど”に頑張るといった志向が見受けられる。

Q8 「人並で十分」か「人並み以上に働きたい」か(経年変化)



一方で、「仕事中心か(私)生活中心か」(Q6)という設問では、常に「両立」という回答が多数を占め、今年度も82.4%と、昨年度の80.9%よりさらに増加している。残りの「(私)生活中心」と「仕事中心」という回答に注目すると、「(私)生活中心」という回答は平成3年をピークに下がり続け、4年前の平成22年に「仕事中心」が「(私)生活中心」を上回ってからその傾向が続いている。

Q6 「仕事中心」か「生活中心」か(経年変化)



## 2. 専門職志向は過去最低

～昇進志向、スペシャリスト志向とも希薄に～

「どのポストまで昇進したいか」(Q13)という問いに対して、最も多かったのは「専門職<スペシャリスト>」で例年通りだったが、その割合は過去最低を更新し19.9%だった。一方、新入社員は、社長や役員、管理職を目指す昇進志向でもない。ここ10年で最も増えたのは、全体から見ればその割合は多くはないが、主任・班長という回答だった。(下記表を参照)

< H16年との比較 >

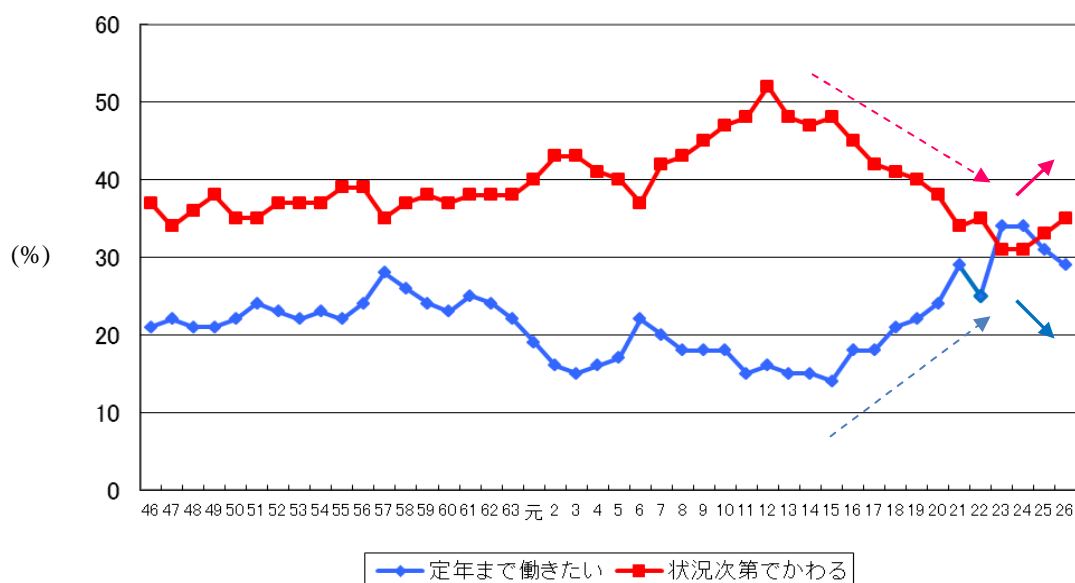
社長	20%	14%	重役	16%	17%	部長	11%	15%	課長	4%	6%
係長	1%	2%	主任・班長	5%	10%	専門職<スペシャリスト>	27%	20%			
(このほかに		役職に付きたくない		3%	4%	どうでもよい		13%	13%		

(小数点以下を四捨五入)

## 3. 「この会社で定年まで働きたい」が減少 ～ここしばらくの流れが反転～

「この会社でずっと働きたいか」(Q18)の設問に対し「この会社で定年まで働きたい」という回答は28.8%で、「状況次第でかわる」34.5%を2年続けて下回った。平成12～15年度以降、「この会社で定年まで働きたい」が増えて「状況次第でかわる」が減る傾向にあり、平成23年は「定年まで働きたい」が33.5%と急増し、「状況次第」を平成23・24年度に2年続けて上回った。しかし、その後は景況感の好転とともにこの流れが逆転し、「定年まで働きたい」は一昨年度34.3% 昨年度30.8% 今年度28.8%と減少している。

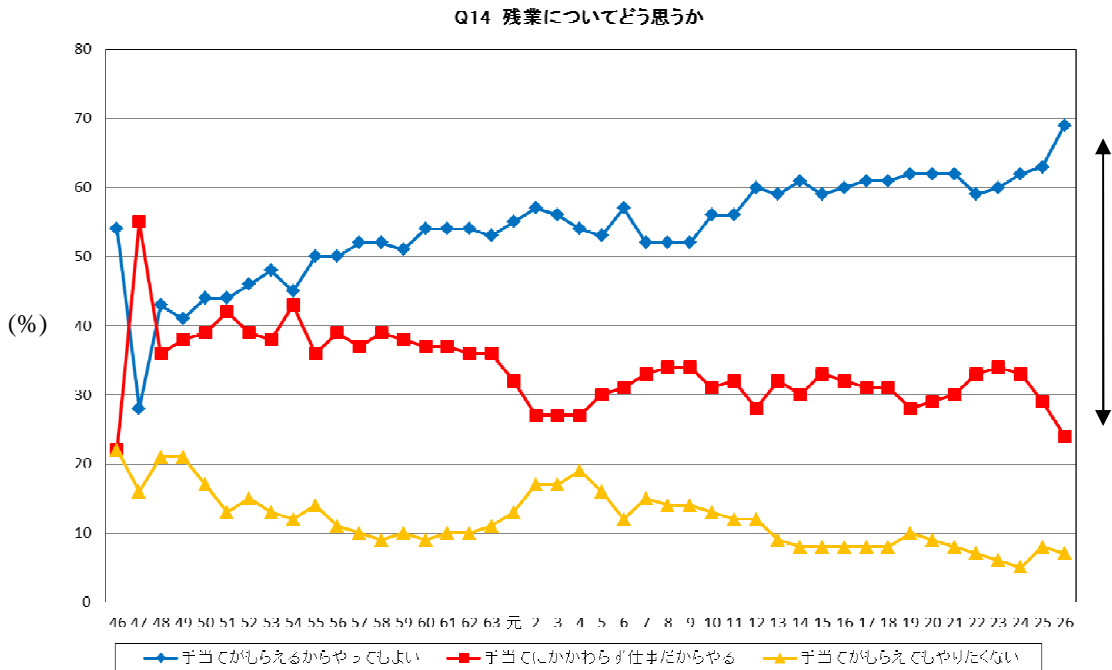
Q18「定年まで働きたい」か「状況次第」か(経年変化)



#### 4. 残業は「手当てがもらえるからやってもよい」が急増

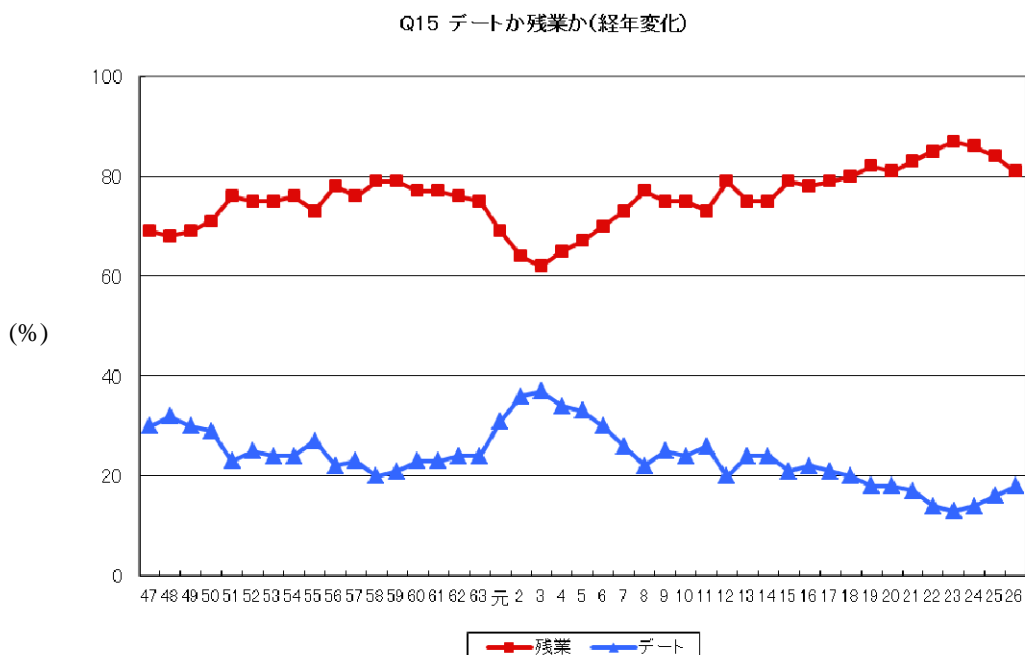
～残業をしたくないわけではないが見合った処遇を～

「残業についてどう思うか」(Q14) という設問に対し、最も多かったのは今年度も「手当てがもらえるからやってもよい」で、昨年度の63.0%から69.4%に急増し過去最高を更新した。昨今の「ブラック企業」などの残業不払いといったニュースを見聞きしている新入社員達が、残業はいとわれないが、それに見合った処遇を求めている傾向がうかがえる。



#### 5. デートか残業か ～プライベートより仕事を優先が多数派～

「デートの約束があった時、残業を命じられたら、あなたはどうしますか」(Q15) という質問に対しては、「デートをやめて仕事をする」(81.3%)、「ことわってデートをする」(18.3%)と、全体としてはプライベートな生活よりも仕事を優先する傾向が引き続きうかがえるが、この数年はやや「デート派」が増加している。



## 6. 「第一志望に入社」 ～ 昨年の過去最低からわずかに改善～

就職氷河期という言葉が定着して久しい。平成 20 年度入社からポスト氷河期に入ったと言われ、平成 21 年度には採用そのものは順調だったものの土壇場になって世界金融危機をきっかけとする経済不安から内定取り消しが出たことが話題となった。そして平成 22 年度、平成 23 年度は採用を絞った企業が多かったため、就職活動は非常に厳しくなった。そこで平成 21 年度から「第一志望の会社に入れたか」(Q33-1)を設問したが、その推移は以下のとおり。

平成 21 年度 62.3(57.2)%	平成 22 年度 55.2(51.8)%	平成 23 年度 56.6(51.5)%
平成 24 年度 60.9(57.3)%	平成 25 年度 52.0(46.3)%	平成 26 年度 55.0(50.1)%

( ) は四年制大卒

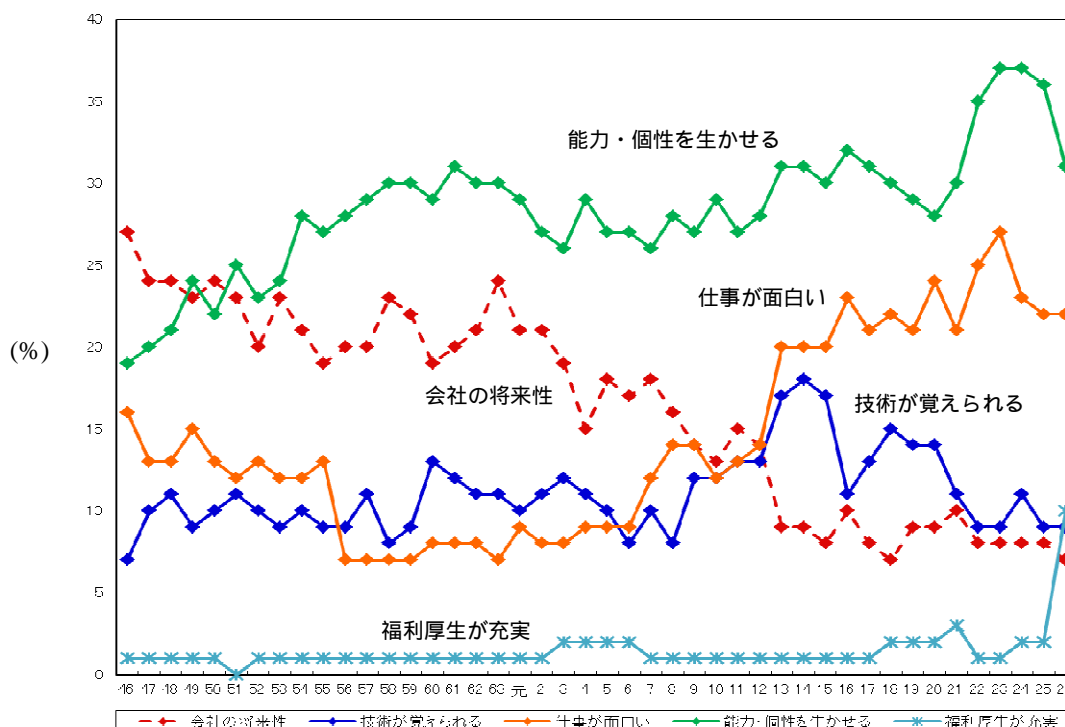
「第一志望の会社に入れた」という回答は、一昨年 60.9%から昨年 52.0%と大幅に減少し、設問設定以来で最低だったが、本年は 55.0%とわずかに改善された。厚生労働省・文部科学省「大学卒業予定者の就職内定状況調査」によれば、4月1日現在の大卒者の内定率は、平成 23 年に 91.0%と過去最低となった後、一昨年 93.6% 昨年 93.9% 今年 94.4%とわずかずつ好転している。

## 7. 会社の選択理由 ～ 自分への適性を重視した「職」選び～

「会社を選ぶとき、あなたはどのような要因をもっとも重視しましたか」(Q1)という質問に対して、最も多かった回答は「自分の能力、個性が活かせるから」(31.4%)だった。以下「仕事がおもしろいから」(21.5%)、「福利厚生が充実しているから」(10.2%)、「技術が覚えられるから」(8.9%)が上位を占めた。

なお、「福利厚生が充実しているから」は調査開始以来初めて上位にランクされたが、選択肢の「グラウンドや寮など」という例示を今年から外し施設面以外も含意させたことによる影響と考えられる。

Q1会社の選択理由(経年変化)



## 8. 就労意識 ~ “感謝される仕事がしたい” が1位~

就労意識について15の質問文をあげ、「そう思う」から「そう思わない」まで4段階で聞いた(Q11)ところ、肯定的な回答(「そう思う」と「ややそう思う」の合計)の比率は以下のような順になった。総じてポジティブないし積極的な態度が上位を占め、反対に、ネガティブないし消極的な態度が下位を占める傾向にあった。

なお、今年から新しい設問項目として「できれば地元(自宅から通える所)で働きたい(14)」と「海外の勤務があれば行ってみたい(15)」を追加したところ、肯定的な回答はそれぞれ64.8%と46.3%だった。今年度の新入社員の3人に2人は地元志向であり、海外勤務にチャレンジしたい新入社員は2人に1人に達していない。

### 就労意識のランキング

Q11. 仕事についてのあなたの考えや希望についてお聞きします

1位	社会や人から感謝される仕事がしたい(13)	96.1%
2位	仕事を通じて人間関係を広げていきたい(7)	95.6
3位	どこでも通用する専門技術を身につけたい(3)	89.0
4位	高い役職につくために、少々の苦労はしても頑張る(9)	85.2
5位	終身雇用ではないので、会社に甘える生活はできない(12)	80.7
6位	仕事を生きがいとしたい(1)	78.3
7位	仕事をしていくうえで人間関係に不安を感じる(6)	66.6
8位	できれば地元(自宅から通える所)で働きたい(14) ……新設	64.8
9位	面白い仕事であれば、収入が少なくても構わない(2)	54.9
10位	海外の勤務があれば行ってみたい(15) ……新設	46.3
11位	いずれリストラされるのではないかと不安だ(4)	39.8
12位	職場の上司、同僚が残業でも自分の仕事が終われば帰る(11)	35.1
13位	仕事はお金を稼ぐための手段であり面白いものではない(8)	32.7
14位	職場の同僚、上司等とは勤務時間以外つきあいたくない(10)	21.2
15位	いずれ会社が倒産・破綻するのではないかと不安だ(5)	20.8

( )内の数字は、調査項目の質問番号

## 9. 生活価値観 ～職場の人間関係への期待や不安も～

一般的な生活価値観について全部で16の質問をした(Q30)。四段階のうち「そう思う」「ややそう思う」の合計を順位づけると、おおむね、積極性を示す項目が上位を占め、消極性を示す項目が下位を占めた。

将来への見通しでは「世の中はいろいろな面で今よりもよくなっていくだろう(18)」が一昨年48.2%から昨年56.5%へ増加し、今年さらに増加して58.8%になった。「世の中はいろいろな面で今よりも昔のほうがよかった(19)」が一昨年45.8%から昨年40.1%に減少し、今年さらに減少して37.0%となった。

一方で、「人間関係では、先輩と後輩など上下のけじめが大切だ(14)」が1位となったが、前出の就労意識(Q11)でも「仕事を通じて人間関係を広げていきたい(7)」(95.6%)、「仕事をししていくうえで人間関係に不安を感じる(6)」(66.6%)といった結果があり、新入社員にとって職場の人間関係への期待や不安が見てとれる。

### 重視する就労意識のランキング

Q30. あなたのいろいろな考え方や経験についてお尋ねします

1位	人間関係では、先輩と後輩など上下のけじめが大切だ(14)	91.3%
2位	将来の幸福のためには今は我慢が必要だ(22)	84.6
3位	明るい気持ちで積極的に行動すれば、たいていはいはできる(13)	82.7
4位	他人にどう思われようとも自分らしく生きたい(23)	81.2
5位	自分はいいい時代に生まれたと思う(20)	75.5
6位	すこし無理だと思われるくらいの目標をたてた方ががんばれる(12)	74.3
7位	あまり収入がよくななくても、やりがいのある仕事がしたい(16)	62.9
8位	冒険をして大きな失敗をするよりも堅実な生き方をしたい(21)	61.9
9位	たとえ経済的に恵まれなくても気ままに楽しく暮らす方がいい(15)	61.1
10位	世の中は、いろいろな面で今よりもよくなっていくだろう(18)	58.8
11位	企業は経済的な利益よりも、環境保全を優先するべきだ(17)	57.9
12位	世の中、なにはともあれ目立った方が得だ(10)	49.9
13位	リーダーになって苦労するよりは人にしがっている方がいい(11)	48.7
14位	自分と意見のあわない人とはあまりつきあいたくない(9)	48.2
15位	周囲の人と違うことはあまりしたくない(8)	43.9
16位	世の中は、いろいろな面で今より昔の方がよかった(19)	37.0

( )内の数字は、調査項目の質問番号

# 平成 26 年度新入社員「働くことの意識」調査の概要

## ．本調査の沿革

本調査は昭和 44 年（1969 年）以来、毎年一回、春の新入社員の入社時期に継続的に実施されてきた。新入社員を対象とするものとしてはもちろん、就労意識をテーマとする調査として他に例を見ない長期にわたる継続的な調査である。これまで 40 年以上にわたり、ほぼ同一の質問項目で実施されており、興味深いデータの経年変化が蓄積されてきた。なお、昨今の終身雇用制の後退、若い世代の価値観の変化などを背景に、時代にそぐわない質問項目が散見されるようになってきたため、平成 13 年（2001）の実施にあたって、いくつかの質問項目を入れ替えた。もちろん、これまでの時系列データの資産的な価値を重視し、多少、最近の新入社員には無理があると思える質問も、極力残す方向でリニューアルをした。今年度はリニューアル後 14 回目の調査となる。

## ．調査の概要

- (1) 調査期間：平成 26 年 3 月 10 日から 4 月 25 日
- (2) 調査対象：平成 26 年度新社会人研修村（国立オリンピック記念青少年総合センター）に参加した企業の新入社員
- (3) 調査方法：同研修村入所の際に各企業担当者を通じて調査票を配布し、その場で調査対象者に回答してもらった。
- (4) 有効回収数：2,203 人
- (5) 回答者プロフィール：

（％）

性別	最終学歴	業種	会社規模				
男性	56.9	普通高等学校	13.9	建設	4.2	99人以下	0.1
女性	42.7	職業高等学校	3.0	製造	16.4	100～499人	6.9
不明	0.0	工業専門学校	3.4	卸小売	31.1	500～999人	17.2
		短期大学	3.9	金融保険	2.5	1000～1999人	19.2
		4年制大学	56.1	不動産	3.8	2000～2999人	6.4
16歳以下	0.1	大学院	8.1	運輸通信	0.4	3000～3999人	6.4
17歳	0.8	専修・専門学校	9.1	電気ガス水道熱供給	0.6	4000～4999人	3.7
18歳	15.8	各種学校	0.5	外食産業	6.1	5000人以上	40.1
19歳	1.0	その他	1.5	情報関連サービス	12.8		
20歳	10.5	不明	0.4	その他サービス	21.6		
21歳	3.4			その他	0.4		
22歳	45.7						
23歳	9.0						
24歳	8.6						
25歳以上	4.7						
不明	0.3						